都留文科大学 地域交流研究センター　機関誌
『フィールド・ノート』 no. 108 Jul. 2021

都留を、観察し、記録する

FIELD NOTE

no. 108 Jul.

特集

あしあとをたどる

冷たい水が水面や苔むした石を打ちつけています。その音だけがあたりに響く心地よさにこの場を離れられません。
撮影地：太郎・次郎滝付近（2021 年 5 月 3 日）

44　センサーカメラが写した動物たち

45　ムササビ観察日記

46　松柏の志　後編 あるがままの心

50　身近な語り部

52　都留の風景写真集 –惜春の候–

表紙写真

本学のうら山を歩いていると、地中に丸い穴が開いているのに気がつきました。じっとしているとハタネズミの子どもに出会えました。
（2021 年 5 月 14 日）

FIELD·NOTE

no.108 Jul.

–特集–

08　文大坂

10　楽山

12　十日市場駅

14　大月駅

16　柳田橋

18　院辺橋

20　城南橋

22　都留市滝下浄水場

24　鹿留発電所

28　フィールド暦

30　くつろぎバッティングセンター

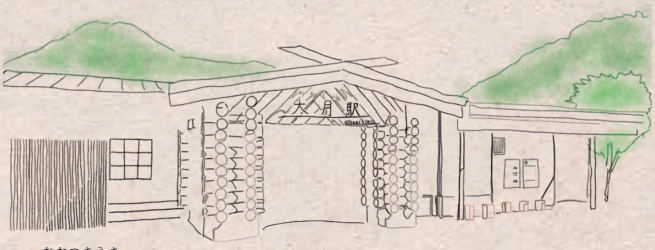
34　新入生ページ　―はじめの一歩―

37　西願寺のあかい芽

41　満喫 高川山

FIELD・MAP

あしあとをたどる



❶ 大月駅（おおつきえき）　p.14-15

〒401-0113　山梨県大月市大月 1-1

本学の学生が帰省や都留市から出かけるときによく使う駅です。
昔は駅前に馬車道が通っていました

❷ 院辺橋（いんべばし）　p.18-19

〒402-0051　山梨県都留市下谷付近

❸ 城南橋（じょうなんばし）　p.20-21

〒402-0055　山梨県都留市川棚付近

❹ 柳田橋（やなぎたばし）　p.16-17

〒402-0053　山梨県都留市上谷 4-7

山梨県都留市

面積 161.63㎢
人口 29.696 人
（令和 3 年 5 月現在）

本学周辺マップ

❺ 文大坂（ぶんだいざか）　p.8-9

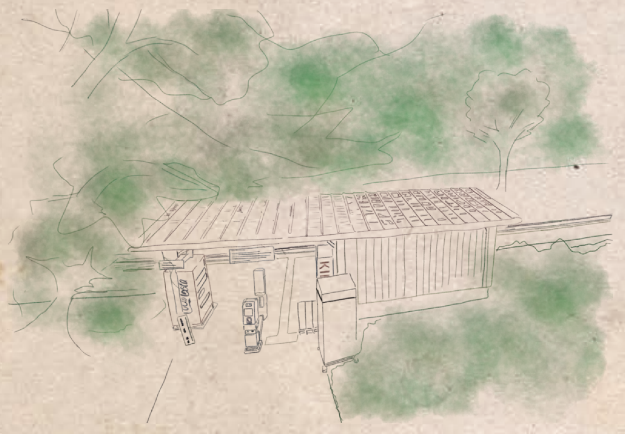
〒402-0053　山梨県都留市上谷 1571-4 付近

本学へと続く坂道です。かつてケヤキの並んでいたこの坂道を、多くの学生が使って登校しています

❻ 楽山（らくやま）　p.10-11

〒402-0053　山梨県都留市上谷 2140

本学のすぐそばにあります。編集部員が定期的に通い、動植物のようすを観察しています



❼ 都留市滝下（たきした）浄水場　p.22-23
〒402-0054　山梨県都留市田原 3

❾ 鹿留発電所（ししどめはつでんしょ）　p.24-25
〒402-0032　山梨県都留市鹿留 54

❽ 十日市場駅（とおかいちばえき）　p.12-13
〒402-0031　山梨県都留市十日市場 769-3

本学最寄駅から西隣の駅です。この周辺に住む学生も多くいます

あしあとをたどる

都留のまちを写した古い写真をみました。

見覚えのない風景。

今よりずっと広い川。

山のかたちや建物をたよりに撮影場所を探します。
今、あの場所はどうなっているのだろう。
写真という記録から変化をひもとこうと
カメラを手に写真が撮られた地へ向かいました。

ぶんだいざか

文大坂

ほどよい木陰をつくってくれそうなケヤキが道に連なっている。今とは違う光景に驚いた（2005年6月8日）

私の知らない景色

過去の大学周辺を伝える資料を見ていると、一枚の写真に目がとまった。写っていたのは「文大坂」と呼ばれ学生に親しまれている坂道だ。急勾配なところは今も変わらない。写真に写る建てものもまだ残っている。しかし一つだけ明らかに違う点があった。坂道に青々と茂ったケヤキが連なっているのだ。「文大坂」ではなく「ケヤキ坂」と名付けたくなるくらいに、木々は高く伸びている。

今の文大坂は、べったりと黒く塗装されたケヤキの切り株に花鉢が置かれた状態だ。切り株には小さな電球も取り付けられていて、夜になるとピカピカと光る。ケヤキを切り取って殺風景になった坂をなんとかきれいに見せるために手を加えたようで、少しあきれてしまう。大学に入学したときからずっとそのような景色を見てきた私には、生い茂った背の高いケヤキがとても新鮮に感じられた。もっと詳しく調べてみよう。興味が湧いた私は、すぐにそう決めた。

ほんの数年前

本学の先生にお話をうかがうと、何枚か写真を提示してくださった。ケヤキを切り取る工事が始まったのは、２０１８年の12月だったそうだ。そして２０１９年の４月に工事が完了したらしい。私が入学した年からちょうどケヤキ並木が見られなくなったと知り、歯がゆい気持ちになった。あと一年でも入学がはやければ見ることができたかもしれない。

ケヤキが連なっていたときのことをもっと知りたい。そう思った私は、当時を知る人びとにお話をうかがうことにした。編集部員の赤松優香（ゆか）さんは、秋にはケヤキの葉がたくさん地面に落ちて、よく滑って転んでいたと話してくださった。また文大坂の通りで40年ほど前から営まれている喫茶店「バンカム、ツル」の店主・中村操（みさお）さんは、「何で切ったんだろうなあ、すごくいい並木道だったのに」と店の窓から坂を眺める。さらに、雪が降り木に積もると、枝に花が咲いているみたいできれいだったことも教えてくださった。

なんだかケヤキとともに、たくさんの人の思い出まで切り取られているように感じてしまう。もう足元を見ても灰色のコンクリートが視界を覆うだけで落ち葉はない。雪が降っても切り株にただ積もるだけだ。私も体験してみたかったなあと、坂道を歩きながら思う。ケヤキが坂をいろどっていれば、息を切らして登るのも一つの楽しみになっていたかもしれない。

＊　＊　＊

文大坂を歩きながら、黒く塗られた切り株に触れてみる。冷たくて、木ではなくただの装飾品にさえ感じられてしまう。「忘れないよ」。小さくなったケヤキに優しく手を当てながら、心のなかでつぶやいた。

深沢有佳（比較文化学科３年）＝文・写真

【参考書籍】『奥隆行写真コレクション』都留文科大学地域交流研究センターフィールド・ミュージアム部門 2012年
『未来に伝えたい都留の記憶』都留文科大学地域交流研究センター都留フィールド・ミュージアム編集部 2005年

上の写真は木の切断工事が始まった当時を記録したものだ。 高く伸びたケヤキがそびえ立っている

撮影日　上：2018 年 12 月 14 日　下：2021 年 6 月 1 日

楽山（らくやま）

花見の名所

7年前から楽山で行われている「つる桜の名所づくり事業」。3年前の写真を見つけ、現在のようすを見に出かけた。

3月29日、楽山公園の入り口からつづく満開の桜並木を歩く。感染症の影響もあり、まちなかで人とすれ違うことも少なくなっていたが、その日は地域のかた数名がお花見にきていた。楽しげにサクラを眺めているようすに思わず頬がゆるむ。

木のしたを見るとスミレが点々と咲いている。土を触ってみると、湿った落ち葉でふかふかとしていた。秋に落ちた葉が腐葉土となり植物に養分を与えているのだろう。ほかにもオオイヌノフグリやフデリンドウなど、多くの植物が春を告げている。植物のいのちが巡っているのを肌で感じて、一つひとつが大切に思えた。

ありのままの自然

さらに歩いて傾斜がきつい道を登ると、赤く錆びた楽山配水場の門があった。見下ろすとサクラが咲き乱れ、登ってきた道が見えないほどだ。

しかし、その門の横を抜けると景色は一変する。急にひらけた視界の先には、むき出しのかたい土と地面からにょきにょきと伸びた無数の白い棒があった。先ほどまでいた色とりどりの世界とはまったく別の場所に来てしまったかのようだ。

この棒の正体は植樹されたソメイヨシノの苗木だった。シカの食害から守るために白いネットが貼られている。3年前に楽山を取材した本誌96号の記事では、苗木の高さは約160センチと書かれている。今では200センチ以上まで成長していた。なかには細い枝に花をつけ始めているものも見られた。

4月8日にあらためて楽山に登ると、前と変わったことが一つあった。楽山配水場へ行く途中に「一〇〇〇本桜　植樹記念」と書かれた石碑が立っていることだ。2014年から始まった事業が今年終わったらしい。ソメイヨシノは20年ほどで大木に育つという。私の子どもの世代には、このサクラも公園の入り口と同じように花をいっぱいに咲かせ、人びとの憩いの場となるのだろう。だがそうだとしても、私は今の山のすがたを見て手放しには喜べない。その場所は、地面に生えている小さな草花の数が極端に少なく、腐ってしまった切り株もたくさん見られた。樹齢20年はありそうな大きな木々がたくさん切られている。一度切った木はすぐには大きくならない。数十年かけて育まれた森が、たった数日で伐採されたと思うと虚しさを感じた。

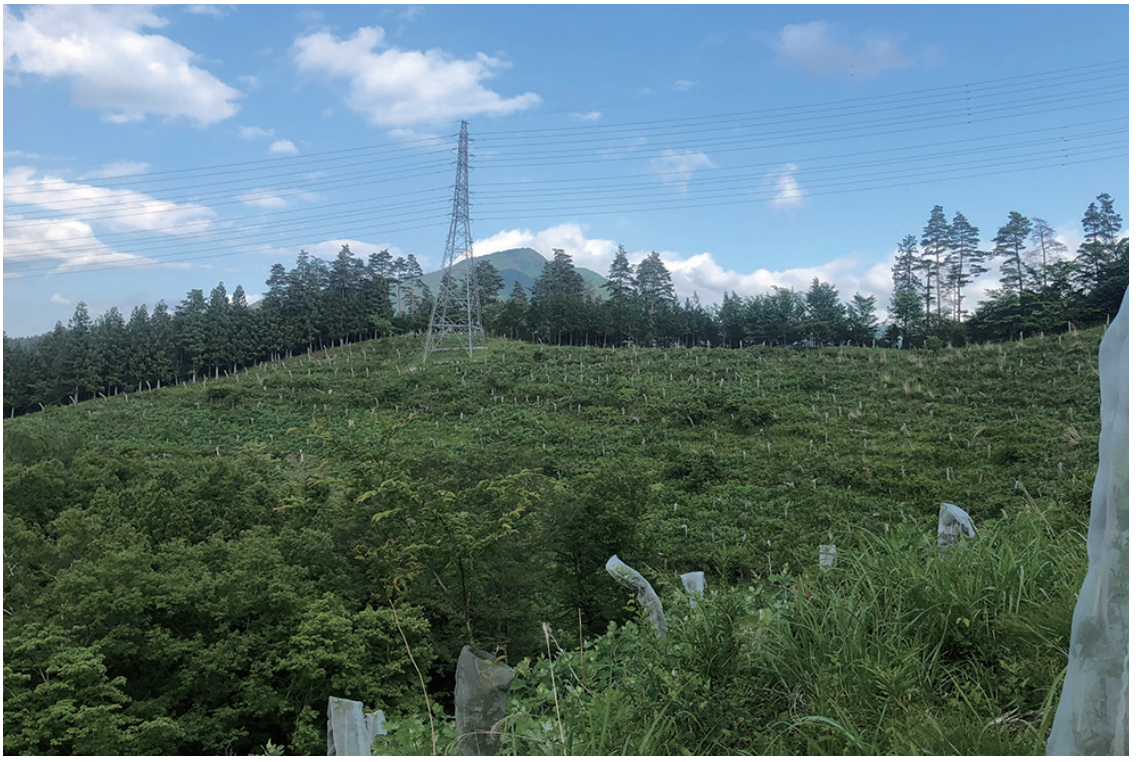
美しい森

帰ってから植樹がはじまる前の写真を探したが、見つけられなかった。そこで楽山の変化を見守ってきた本学の先生にうかがうと、かつて楽山にはホオノキやケヤキが茂る森があったという。それらは強い土壌を作ったり、生きもののすみかになったりと、重要な役割を持っていた。先ほど見た切り株が脳裏に浮かぶ。サクラは華やかで多くの人に好かれる花だ。けれど、その景色をつくるために、元あった自然が丸ごとなくなってしまったことを忘れないでいたい。

目に鮮やかであることだけが美しさではないことを取材をとおして学んだ。写真に残らないような目立たない自然にだって大切な価値があるのだ。

渡邊唯（地域社会学科3年）＝文・写真
北垣憲仁＝写真

すっかり初夏の景色になった 5 月の楽山 (下図)。 高い木がないため日差しがジリジリと照りつける



撮影日　上 : 2018 年 12 月 1 日　下 : 2021 年 5 月 31 日

とおかいちばえき

十日市場駅

富士急行

平成16年に都留文科大学前駅が開業されるまで、十日市場駅は谷村町駅とならんで本学の最寄り駅とされた。現在も駅前にはアパートが点在し、むかしと変わらず学生とのかかわりが深い駅である。

十日市場駅の桜の木が盛りをむかえた3月の末、持ち主の帰りを待つ自転車と並んで電車の到着を知らせるアナウンスをきく。古写真のなかにも、駅舎の屋根のしたで休む自転車のすがたがあった。いつの時代も主人の帰りを待つその従順さは変わっていない。桜がつくるわずかな日陰は自転車にとられてしまっていたので、夕暮れの日差しを浴びながら電車を待った。

到着の音

しばらくしてガタン、ゴトン、と電車が通過した。ほんとうにガタン、ゴトン、と聞こえた。慣れ親しんだあの表現との答え合わせができたような気がした。電車はそう音を立てて進むものであると疑うことなく受け入れていた私は、今まで一度も電車の音をしっかりと聞いたことはなかった。知っていたはずのことが本当だとわかる。私の胸にはしずかな高揚感が生まれていた。

通過した電車は平成31年に開通したばかりの「富士急行直通特急・富士回遊」だ。真新しい車体に、青と黒のラインが引き立っている。古写真と見比べると電車の見た目がおおきく変わっていることがわかった。つづけて到着したのは、富士急行線のラッピング電車だ。少年漫画のヒット作や、世界的な絵本のキャラクターが車体にプリントされている。ゆったりと停まった電車をもういちど見送るつもりだったが、なぜだかじっとしていることができなかった。ICカードで改札を抜けた私はいきおいで電車へと乗り込む。目的地を決めずに電車に乗り込むなんてはじめてだ。動き出した電車のなかで深く息を吸う。これからどこへ向かうのか、すこし不安でそれ以上にわくわくしていた。

都留のまち

いつもなら乗り込んですぐに手に取る携帯もカバンにしまったままにして、車窓から景色をのぞく。なんども降りたことのあるはずの東桂（ひがしかつら）駅に桜の木々が植えられていたことにはじめて気がついた。

電車のなかで携帯をのぞきこんでばかりの私とはちがい、古写真のなかの人びとはまっすぐ前を向いて電車に乗っている。変わりゆく駅前のようすや、木々のうつろいをきっと彼らは無意識のうちに覚えているのだろう。一年間、都留に住んでみて私はこのまちを知ったような気になっていた。改札を抜けてみえるまち並み、色づいていく春の木々、みてきたはずなのにその様子をだれかに伝えることはきっとできない。電車の音も、まちの景色も、私は知っていると思い込んでいただけだった。

私の前にすわる子ども連れのおかあさんも、リュックを抱きしめて眠る高校生も、古写真のなかにうつる彼らにも、きっとそれぞれ目的の場所がある。さあ、どこへ行こうか。桜が綺麗にみえる川辺、おいしいケーキの喫茶店、知っているつもりのことを確かめに行こう。すぐに通り過ぎてしまうまちの景色を見逃さないよう、私はもういちどしっかりと前を向いた。

高木帆月（比較文化学科2年）＝文・写真

【参考書籍】『奥隆行写真コレクション』都留文科大学地域交流研究センターフィールド・ミュージアム部門 2012 年

42 年前と現在の十日市場駅のようす。駅舎や電車は変わっているが、どこか面影がのこる

撮影日　上：1979 年　下：2021 年 3 月 27 日

おおつきえき
大月駅

古写真に写された身近な場所

4月5日、私は古写真を手に大月駅へと向かう。目的は、古写真（左ページ上）に写されたものと同じ景色を撮影することだ。この日は分厚い雲が空を覆っており、今にも雨が降り出しそうだった。このところ晴れの日が続いていたからか余計に寒く感じられ、外へ出るのもおっくうになる。それでも写真と同じ場所を探すとなるとわくわくして、自然と足取りも軽くなった。

どこから撮影したのだろう。駅のホームからか、改札を出たあたりからだろうか、などと電車に揺られながら予想する。あれこれ考えているうちに目的地の大月駅に着いた。さっそくカメラを構える。まずは中央本線のホームから撮ってみよう。あたりを見回すと、駅の周辺にはいくつか山があった。一つひとつの山を似たような角度で撮ってみたが、どうもしっくりこない。明らかに山の大きさや形がちがう。

撮影しているうちに、さらに天気は悪くなり寒さも増してきた。雨が降ってきれいに撮影できなくなってしまう前に、古写真と同じ場所を見つけなければ。難しいなあ、とため息をつきながらICカードをタッチして駅を出る。ふと空を見上げると、そこには古写真に写っていたあの山がそびえ立っていた。「あれ、もしかして」。一人で感動しながらシャッターを切る。撮った写真の光景は、たしかにあの古写真そのものだった。よく見ると、駅から商店街に向かう道も変わっていない。ターミナルにいたタクシーの運転手さんが不思議そうにこちらを見ているのがわかったが、それでも胸の高鳴りを抑えられなかった。あそこに馬車の建物があったのか、馬もいたのかと、過去と今とを重ね合わせた。建っているビルやお店からはわからないが、たしかに同じ場所に同じ道路、同じ山がある。過去の大月駅にタイムスリップできたようで嬉しくなった。

私の知らない大月駅

古写真と同じ場所から撮影できた私は、しだいに写真のなかに写っているものも気になり始めた。とくに写真右側の「富士馬車鉄道株式会社」と書かれた建てものが目につく。調べてみると、どうやら富士馬車鉄道は明治36年に運転が開始され、「テト馬車」と呼ばれるものが走っていたらしい。たった一枚の写真から、馬が人を運ぶ時代にまでさかのぼることができた。

また大月駅付近で30年以上営まれている定食屋「うづき」の店員さんに大月駅の移り変わりについてうかがった。「エレベーターやターミナルができたことが一番大きかったことかな。観光客は昔から絶えないねえ」と教えてくださる。それらを当たり前に見ていた私は目を丸くした。過去の大月駅など考えたこともなかったからだ。今見ている景色が今までもこれからも続くのだろうと、勝手に想像していた気がする。「時代は変わる」というけれど、今回ほどその言葉を実感したことはない。

＊　＊　＊

古写真を思い出しながら今日も大月駅付近を歩く。いつもと変わらないまち並みだ。私が見ているこの景色も、きっといつかは変わってしまう。今ある風景を知る手がかりがなくなってしまわないように、一人の観察者としてしっかりと書き留めておきたい。

深沢有佳（比較文化学科３年）＝文・写真

【参考書籍】『奥隆行写真コレクション 都留文科大学地域交流センターフィールド・ミュージアム部門 2012 年
【参考サイト】都留市立図書館「富士馬車鉄道」（最終閲覧日：2021 年 4 月 30 日）
https://www.lib.city.tsuru.yamanashi.jp/contents/history/another/kingendai/fujibasya.htm

建てものは変わっても山がそびえ立つようすは変わらない。人びとでにぎわっているようすも同じだ

撮影日　上：戦前　下：2021 年 4 月 5 日

柳田橋（やなぎたばし）

気づかなかった場所

古写真に記されていた言葉は「柳田橋から城山を望む」。「柳田橋」は、国道１３９号を都留興譲館高校から大月方面に１００メートルほど進んだところにある。私が谷村町にあるアルバイト先へ行くときに通る場所だ。しかし橋の名前までは知らなかった。思い当たるのは、橋というより、川の上を通る二又に分かれた道路である。いっぽう、周辺の住所には「柳田橋」という表記が入っていて、地名としては残っているようだ。

撮影された場所がわかっても、そこから山が見えた記憶はない。古写真を持っていき、写真と同じと思われる場所に立つ。まっすぐ前を向くと、たしかに城山（勝山城跡）があった。「ここから見えたんだ」。そう驚くと同時に、「いつもはどこを見ながら通っていたのだろう」と思いをめぐらせてみる。付近には二階建ての家が建っているため、古写真のように山のすべてが見えるわけではない。それでも途中までの山の形が同じで、城山だとわかった。古写真は１００年ほど前の明治時代末期に撮影されたものだ。今の風景と比べると、いくつか気づくことがある。

まず古写真の城山には木が生えていない。以前、城山に登ったときは、樹齢何年だろうという大きな木やうっそうとした竹林があった。山頂には桜もたくさん咲いていた。そのため、木がない時代があったとは想像がつかない。ほかにも川のようすが変わっている。昔よりも川幅は狭くなり、道路よりも低い位置を流れている。大規模に整備されたのだろう。安全対策なのか、のちに川沿いにはフェンスもとりつけられた。古写真では一軒しかなかった家も、今では多くの家が立ち並んでいる。長い時間が経つと、生活や、川や山などの自然にも目に見える変化があった。

当たり前が変わる

古写真を眺めていると、たくさんの疑問がわいてきた。古写真にうつる畑は、このあたりで盛んだった養蚕のための桑畑なのだろうか。城山の木はどのように増えてきたのだろう。柳田橋周辺の変化を知りたくなり、調べてみることにした。都留市のことを書いた資料を何冊も読み、ほかにも写真がないか探す。しかし、くわしいことは何もわからなかった。この写真をとった人が見た景色と私が見ている景色はまったく違っているのに、記録はほとんどない。ここには何か特別な建物が建っているわけではないから、風景を記録しようとも思わなかったのだろう。

そういえば、私も実家に住んでいたころは庭に咲くたくさんの花に対してなにも思わなかった。しかし、今では帰省のたびに写真に納めていることを思い出した。ふだんは身近に存在するものが、時間や場所を隔てるだけで新鮮に映る。私が撮影した場所も何十年かあとには大きく変わっているはずだ。この景色も今だけのものかもしれない。

＊　＊　＊

今も毎日のように、私はこの場所を通っている。古写真と出会ったあとからは「変化を見つめていきたい」そう思ってこの場所を通るようになった。最近は城山の緑が濃くなり、初夏の訪れが感じられる。水路の掃除のために止まっていた水も流れはじめた。短い時間のなかでも、当たり前の風景は変わり続けている。

髙橋杏佳（地域社会学科２年）＝文・写真

【参考書籍】『奥隆行写真コレクション』都留文科大学地域交流研究センターフィールド・ミュージアム部門 2012 年

古地図と比べると、川が流れる位置や道の通り方は明治時代末期と今とでほとんど変わらない

撮影日　上：明治時代末期　下：2021 年 5 月 27 日

院辺橋（いんべばし）

アーチのゆくえ

新学期が楽しみになるような晴れた日に、都留市立病院の近くにある院辺橋へと向かった。都留での生活を始めて一年が経ったが、院辺橋をはじめ、まだ知らない場所がある。都留のまちを歩くのは、まるで宝探しのようだ。期待と不安で胸がいっぱいになる。

地図のとおりに進むと、そこには新しそうな橋がかけられていた。私が見た2枚の古写真には、大正12年にかけられた吊り橋と、昭和34年にかけかえられ、アーチがついた橋が写っていた。この新しい橋はどちらとも結びつかない。「場所を間違えたのかな」と地図に再び目を落としたが、ここが目的地だと示している。院辺橋はなくなってしまったのだろうか。

しかし、その橋をもう一度よく見ると「新院辺橋」の文字がある。「新」ということは、昔の院辺橋とは違うはずだ。あたりを見渡すと、古写真に写っているアーチがかかった橋を見つけた。「よかった、あった」。さっきまで感じていた疑問が一転、晴れやかな気持ちで院辺橋へと足を進める。

親子のような橋

近づいて見てみると、鉄でできたアーチにはサビがついている。そのサビは、長い年月にわたってたくさんの人たちの交通を支えてきた勲章だ。私は自分のことのように誇らしい気持ちになった。アーチがついた院辺橋の古写真にはバスが写っていた。この橋が交通の要として役に立っていたことが伝わってくる。観察しているときにも車や自転車の往来があった。新院辺橋がかけられても、院辺橋は現役で活躍している。

新院辺橋は、平成30年に宝バイパスへとつながるようにかけられた。トラックをはじめとするたくさんの車が行き交っている。私はそのようすを院辺橋から眺めていた。新院辺橋はまるで働き盛りの若者のよう。いっぽうで院辺橋はそっと見守る年長者のようにたたずんでいる。そこでふと、「親」という漢字の由来を思い出した。この字は木の上に立ち、子どもを見守るようすを表現しているという。私には、向かいあう院辺橋と新院辺橋が互いに頼もしさを感じている親子のように見えてきた。

＊　＊　＊

院辺橋は、吊り橋からアーチがついた鉄筋コンクリート製の橋へと変わり、そのとなりに新院辺橋がかけられた。吊り橋、アーチの橋、新院辺橋と親子三代にわたって市民の交通を支えてきたようだ。

２つの橋は、この先どうなるのだろう。ひょっとしたら親子四代目となる新たな橋がかけられるかもしれない。橋のすがたが変化しても親子のように支え合っていてほしい。

阿部くるみ（地域社会学科２年）＝文・写真

新院辺橋をよく見ると、下の支えがアーチ状になっていることがわかる（2021年４月７日）

【参考書籍】『わたしとあなたの都留アルバム コレクション①』都留文科大学地域交流センターフィールド・ミュージアム部門 2015年

吊り橋だったころの院辺橋。現在では、道路が整備され橋のすがたが変わってきたことがわかる

撮影日　上：1932 年ごろ　下：2021 年 4 月 7 日

城南橋（じょうなんばし）

川棚橋をたずねる

「あれ、こんな橋あったかな」。写真には鳥居からのびる吊り橋が写されていた。写真の説明には、「川棚橋（かわだなばし）」と書いてある。調べてみると、現在は城南橋と呼ばれているそうだ。私は3月に城山に行ったことがあったので、桂川に一本の橋がかかっていたのを覚えている。しかし、写真の川棚橋と記憶にある橋とではまったく、すがたが違う。現在の橋のすがたを確認するためにもう一度、城南橋へ向かうことにした。

城山に向かった4月6日は、夏を感じさせる暑さであった。着ていたアウターを脱いで、額から流れる汗を拭う。谷村町（やむらまち）駅の踏切をわたり、富士見という急な坂をくだると、灰色の門がみえてきた。それは私が知っている城南橋だった。橋の両端にはコンクリートでできた門のようなものがある。城南橋のこの門はかつての鳥居を真似したものなのだろうか。現在の橋に、川棚橋の面影をみつけ、私はすこし安心した。もしかすると、橋の面影がどことなく似ているのは、この橋を愛する人が多かったからなのだろうか。

川棚橋と城南橋

両者の一番の違いは見た目である。川棚橋は木でつくられた橋だ。鳥居も木でつくられている。橋の中央は垂れさがっていて、飛び跳ねたらギシギシと音を立てて揺れたのだろう。城南橋の頼もしさに慣れているためか、そんな想像をするだけですこしドキドキしてしまう。

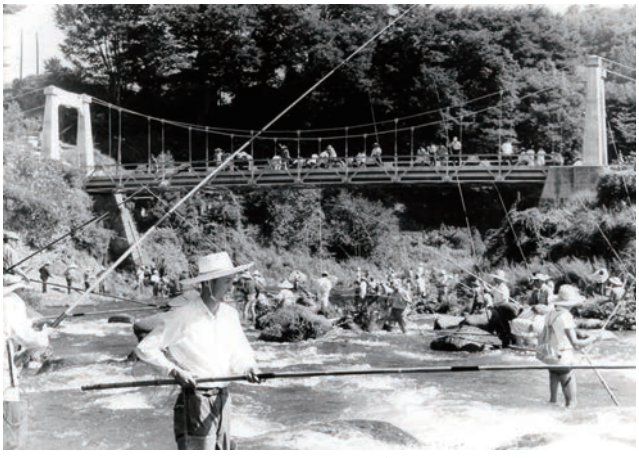
いっぽうで城南橋はコンクリートや鉄でつくられている。床の部分は、板がキッチリと並べられフローリングのようだ。頑丈につくられているため、車が通過しても大きく揺れることはない。落下防止のためか、手すりにはワイヤーが張られていた。

橋からふっと川のほうに視線を落とすと、そこでは一人の男性が釣り竿の糸を川に投げ込んでいた。最近、ヤマメとマス釣りが解禁されたので、それらを狙っているのだろう。1961年に城南橋近くで撮られた写真でも、桂川で釣りを楽しむたくさんの住民のすがたを確認できた。城南橋近くの桂川は、今も昔も変わらず渓流釣りのスポットになっているようだ。

＊　＊　＊

川棚橋は城南橋へと名前を変えた。それでも同じ場所から、川と人びとの生活をずっと見守っている。この橋は時代の定点観測をするにはぴったりの場所だ。何百年も同じ場所からどのような景色をみてきたのだろうか。きっと、私がみている現代のようすも橋にとっては長い歴史の一瞬にすぎないのだ。

佐藤優美（国文学科2年）＝文・写真



アユを釣る人のうしろに写る城南橋（1961年）

【参考書籍】『奥隆行写真コレクション』都留文科大学地域交流研究センターフィールド・ミュージアム部門 2012年

川棚橋についての情報はすくないが、すくなくとも江戸時代には架けられていたようだ

撮影日　上：戦前　下：2021 年 4 月 16 日

都留市滝下浄水場（たきした）

都留市滝下浄水場へ

古写真には、「都留市滝下浄水場」の看板をかけた門が、写されていた。本学の先生から「都留市滝下浄水場、というのが鶴水園（かくすいえん）の一部にあったんですよ」ときいて、思わず首をかしげてしまう。はて、そんな施設がはたしてあっただろうか。

鶴水園は現在の「割烹鶴水（かくすい）」のあたりをさすようだ。その横には、本学へ続く道路が通っている。私もその道を通って学校に向かっている。それでも、浄水場らしい大きな水槽や建物をみたことがなかった。疑問を晴らすため、当時の写真をもって都留市滝下浄水場を探してみることにした。

「ここだ」。写真の場所は、「割烹鶴水」を右に曲がり、5メートルほど歩いたところでみつけることができた。看板のフォントや門の色が異なっているが、うしろのドーム型の施設や本学の音楽棟の配置から、ここが写真と同じ場所であるとわかる。何より、看板に記された名前が同じなのが決め手だった。その浄水場はまわりの景色に溶けこむように、静かにたたずんでいた。探そうと思わないと危うく見逃してしまいそうなほどだ。石柱で支えられた鉄の門は、ところどころ茶色くサビついている。人目につきにくい施設だからなのだろう。そのサビに、どことなく哀しさをかんじた。

「きれいな水」をつなぐ

都留の水は川底がみえるほど透明で清らかなのに、どうして浄水施設が必要だったのだろうか。そこには、上下水道が整備されていない時代の苦労があった。

この都留市滝下浄水場は大正11年に造られ、施設のすぐ近くを流れている家中川（かちゅうがわ）を浄水していたようだ。その理由として明治後半にはやりだした感染症があげられる。まだ浄水施設が一般的でなかった明治期、谷村町では、家庭からでる米のとぎ汁や工場からでる染料などが家中川にそのまま流れ込んでいた。今では信じられないが、水質はかなり悪かったようだ。コレラや腸チフスなどは汚染された水が原因で発症することが多い。生活水として用いられていた家中川が汚れていたこともあり、谷村町でも流行してしまったことが記録に残されている。

感染症の根本的な解決を目指すため、都留市滝下浄水場はつくられた。この浄水場が川の美しさをたもち、人びとの命を守ったと知ると、さびれた浄水場も頼もしくみえる。

＊　＊　＊

古写真は私に一つの浄水場を教えてくれた。それは、かつて都留の人びとの暮らしを守るために建てられた施設であった。ひっそりと立っている浄水場の門は、まるで自分の役割を果たした老人が隠居しているようだ。この浄水場は現代に「きれいな水」というバトンを渡してくれた。現在では上下水道が完備され、川の水は誰にでも自慢したくなるほど透き通っている。だからこそ、河川敷や川の流れが穏やかなところにたまるゴミは、残念でならない。

私たちの次の世代へ「きれいな水」のバトンをつなぐ。受け取ったバトンを落とさないためにも、大切に水を使うことから始めよう。蛇口をひねれば簡単にでる水も、浄水場の歴史を知った私には、とても価値のあるものに思えるのだ。

佐藤優美（国文学科2年）＝文・写真

【参考書籍】『奥隆行写真コレクション』都留文科大学地域交流研究センターフィールド・ミュージアム部門 2012 年
【参考資料】『都留市史資料編近現代』都留市史編纂委員会 1993 年

現在は浄水場として働いていないが、よくみるとかつてのおもかげが残っている

撮影日　上：戦前　下：2021 年 4 月 9 日

鹿留発電所（ししどめはつでんしょ）

桜と送水管

古写真のアルバムをひらく。何気ない日常から今でも名残のある風景まで、さまざまな写真が並ぶ。なかでも私が気になったのは、整然と並んだパイプが取り壊されている写真だった。

東桂駅を降りて住宅街のわきを流れる用水路をみつけた。水の流れをたどって、桂川の河川敷へ向かう。桜並木を歩いていくと、そこには鹿留発電所があった。

鹿留発電所は山の斜面を利用した水力発電所だ。大正2年に運用がはじまり、現在にいたるまで電力を供給しつづけている。設置された送水管の周囲には250本を超える桜が植えられており、4月の上旬には見ごろを迎える。桜に彩られた送水管の迫力にあらためて圧倒された。この大きな送水管のなかを水が通り、水が流れおちる力をつかって水車が回る。そして水車の回る力が大きなエネルギーへと変換され、電力として供給されていくのだという。

古写真をとりだして、じっさいの風景とみくらべてみる。桜が植えられる前の山肌がみえる斜面には、もともと三本の送水管が設置されていたようだ。送水管が解体された理由を本学の先生に尋ねたところ、戦時中に鉄資源を供給するためだと教えてくださった。

ごうごうと流れる水の音が聞こえるものだと思っていたが、あたりはとても静かで桜が風に揺れる音と川のせせらぎだけが響いていた。こんなに穏やかな風景のなかにも、戦争のあしあとが刻まれている。そのことを思うと、静けさをまとった送水管が夕暮れのなかでやけにさみしく感じられた。

かたちを変えて

後日、都留のまちですっかり5月の色になった桜をみて、少し名残惜しい気持ちになった。「鹿留発電所の桜がきれいだったんだよ」。隣をあるく友人にそう伝える。古写真をみせながら「両はしの送水管は戦争が理由でなくなっちゃったんだって」と指さすと、「その代わりに桜が植えられたのかな。桜がなかったらすごくさみしい風景だもんね」と友人は答えた。桜がなかったら、なんて考えたこともなかった。ごつごつとした山肌と、一本だけの送水管の景色を想像してみる。たしかにその風景はとても殺風景になってしまうような気がした。

植えられた桜によって、鹿留発電所は地域の人びとに愛される場所になった。桜がつくる華やかな景色は、ほの暗い歴史を覆いながら、私たちの心にぬくもりをあたえてくれている。これからも春がくるたび、鹿留発電所には人びとが桜をみに訪れるのだろう。けれど、この景色のなかにも忘れてはいけない記憶が刻まれている。鹿留発電所があゆんできた軌跡をより多くの人に知ってほしい、そう強く思った。

＊　＊　＊

古写真を通じ、その場所が体験した記憶を知る。そのことによって、何気ない景色はより多くの色彩をもって私へ語りかけた。「消えつつある」とささやかれる戦争の記憶だが私たちの日常のなかに、さまざまなかたちで残りつづけている。まちに隠れるその記憶に気づくことは、戦争を知らない私たちが戦争というものを記憶するための大きな一歩になるだろう。

髙木帆月（比較文化学科2年）＝文・写真

【参考書籍】『奥隆行写真コレクション 都留文科大学地域交流センターフィールド・ミュージアム部門 2012 年
【参考サイト】富士の国やまなし観光ネット「鹿留発電所の桜」（最終閲覧日：2021 年 6 月 1 日）
https://www.yamanashi-kankou.jp/kankou/spot/p1 _ 3668.html

取り壊されている最中の写真。戦前とくらべ本数は減ったが、送水管はより太い造りとなっている

撮影日　上：戦前　下：2021 年 3 月 27 日

一枚の古写真から、何が見えてくるのだろう。
そんな疑問が、都留のさまざまな移り変わりを
知るきっかけになりました。
都留の自然が切り取られていくようす。
駅という身近な場所から見る、列車や
人の暮らしの昔と今。
ふだんから目にしている場所の歴史。
古写真という「あしあと」を自分たちでじっさいに
たどらなければ、気づけなかったことでしょう。
今、私たちはなんでも気軽に調べて

答えを得られる時代に生きています。
しかしそんなときだからこそ、自分で疑問を
抱き、考え、調べてみる。
そうすればきっと、手元で得られるものよりも
満足のいく自分らしい発見ができるはずです。
私たちはこれからも、目の前の風景を
「あしあと」として残していきます。

令和三年
雨にぬれる緑が美しいころ

フィールド暦

春から夏にかけて、生きものたちの活動が盛んになってきます。2021 年 4 月から 5 月に撮影された色鮮やかな生きものたちを紹介します。
本学フィールド・ミュージアム=文・写真

スズムシソウ
(2021 年 5 月 17 日) 本学うら山

ランの仲間です。花弁（唇弁（しんべん））がスズムシの雄の羽に似ていることからこの名がつきました。多くの地域で個体数が激減しています。

ナナフシモドキ
(2021 年 4 月 6 日) 城南橋付近

木に擬態しているようです。体の色は緑色や茶色と個体によって変わります。オスは非常に珍しく、国内でも 10 数例しか見つかってないそうです。

マミジロハエトリ
(2021 年 4 月 6 日) 城南橋付近

ハエトリグモは足が短くジャンプをするのが特徴です。マミジロは「眉白」と書き、その名の通り、頭の上の部分に白い線が入っています。

オオヤマカワゲラ
(2021 年 5 月 26 日) 本学 4 号館

カワゲラは水のきれいなところに生息します。幼虫は水のなかで暮らし、 4月から 6 月ごろ羽化します。羽の縁にある黄色い帯が特徴です。

ミツマタ
(2021 年 4 月 2 日) 本学うら山

和紙や紙幣の原料となる木です。早春には、三つ又に分かれた枝先に黄色い花を付けます。本学うら山の遊歩道で観察できます。

ギンラン
(2021 年 5 月 10 日) 本学うら山

ランの仲間です。本学うら山の遊歩道で出会いました。茎に数個ほどの白い花を付けます。高さは 20 センチほどでした。

クジャクチョウ（2021 年 4 月 1 日）キャンパス周辺

日本では滋賀県以北に生息し、幼虫はカラハナソウやハルニレなどを食草とします。成虫で越冬し、都留では 4 月ごろから姿を見かけます。

テングチョウ（2021 年 4 月 3 日）キャンパス周辺

触覚の内側には前方に伸びる突起があり、これを天狗の鼻に見立ててこの名がついたそうです。都留では 3 月ごろから見られます。

マルバスミレ（2021 年 4 月 6 日）城南橋付近

名前の通り、他のスミレに比べて丸い葉を持っており、白い花びらが特徴です。キャンパス周辺でも観察することができました。

ヤマブキ（2021 年 4 月 10 日）キャンパス周辺

バラ科の低木です。4 月になるとキャンパス周辺で金色に近い黄色の花が目立つようになります。北海道から九州まで分布しています。

フデリンドウ（2021 年 4 月 19 日）キャンパス周辺

高さ 5 センチほどで、日が当たっている時間だけ花が開きます。林のふちの、やや乾燥した場所で見かけました。この季節に咲く青紫色の花は目立ちます。

イカリソウ（2021 年 4 月 20 日）キャンパス周辺

舟の錨のような形をした花が印象に残りました。花期は 4 月から 5 月だそうです。今年もキャンパス周辺の林で紫色の花が咲きました。

くつろぎバッティングセンター

通学路に、なにやら新しい建物が建つようだ。その外観は清楚なカフェを思わせる。しかし店内は全世代にひらかれたバッティングセンター「T-dome79（ティードームナナキュウ）」である。改築にあたり居心地のよさをとことん追求した、ジェネラル・マネージャーの杉本秀樹さん（52）にお話をうかがった。

丸谷美寧（国際教育学科3年）＝文・写真

ドラマのはじまり

その建物を遠くから見ると、巨大な一斤の食パンが置かれたようだ。気になって四方から見るが、まだ看板はない。もしかすると、と思い「都留バッティングセンター」と検索した。それはこの場所にもともとあった野外型のバッティングセンターだ。検索画面で目に留まったのは、『都留バッティングセンター再生劇場のはじまり』の文字である。これがバッティングセンターの改築を知った瞬間だった。

そのブログを一気に読み進める。内容からていねいな仕事ぶりが伝わってきた。独自の野球人口グラフが示され、短文ながら説明がわかりやすい。店主は熱血な野球好きだろうと想像がふくらんでいく。じつは、4年前にも本誌がこのかたを取材していた。本誌95号に掲載されている「おれ、勝負をかけてみたい」という記事だ。創業のきっかけとなった先代店主の言葉が題名になっている。読んでみると、施設の存続は「現場で決める」とあいまいに記されていた。改築までにどんなドラマがあったのだろう。

自分の意思で

先代の息子さんである秀樹さんはとても穏やかなかただった。言葉をゆっくり拾うように取材に応じてくださる。「親がやっていた。ただそれだけで、俺は俺。おやじはおやじという感じで。おやじは、ここを自分の代で終わらせると、つねづねいっていました。

青空やシバザクラのピンクにその白さが際立っていた（2021 年 4 月 11 日）

お互いそれぞれの道を歩んできたんですけど、きっかけはおやじが病弱になって療養期間を経て亡くなったという、そのあたりから果たしてこの施設をどうしようかと」。全国で野球人口が減り、お客さんが限られるなかでも土・日営業を続けていたという。毎週のように来てくれる人びとの反応が少しずつ自信になり、改築に向け動きだした。

施設の経営に本腰を入れるため、仕事は退職した。お子さん3人が親元を離れたこともよいタイミングだったそう。事業に本格的に取り掛かるものの、はじめはだれの理解も得られなかったと振り返る。「周りは（先行きが）わからないから辞めろというんですけど、それでも思いだけで突き進んじゃいました」と照れくさそうに笑った。なんでもないことのように話すのは、企画のはじめから変わらない芯があるからだろう。

なかでも資本のやりくりが難航したようで苦い顔を浮かべる。何度断られてもめげずに事業計画書を練り上げた。すると採用の難しい国の補助金に申請が通ったのだ。それをきっかけに、周りも応援してくれるようになってきたという。「一回目の（申請の）ときはまだ初めてだったので、あんまり奥深く考えなかったっていうことかな。見透かされたんでしょうね。二度目はしっかり奥深く入り込んだ計画書をつくったので、認めてくれたのかなという感じがしますね」。本人はどこまでも謙虚な姿勢だ。

いつまでも

秀樹さんはよりよいサービスを提供したいと、全国80か所以上のバッティングセンターを視察した。いつも経営者と連絡がつくわけではない。そんなときはその場にいたアルバイトにも話を聞いた。「もう熱を帯びていたので打てる手はぜんぶ打ってやろうと」。早まる口調に秀樹さんの熱意がうかがえる。各地をめぐり、時代にそった飽きがこない企画の大切さを実感したそうだ。計画には、そんな魅力をどんどん取り入れた。

改築ではまず、温度が調節できる室内型に切り替えた。雨風に左右されることなく、いつでも快適に楽しめる。ちいさな女の子でも当たるようにと、ホームランが出やすい設計にした。当たる気持ちよさをうんとみんなに体感してもらいたいという想いが込められている。さらに入口ちかくには、最大の協力者だという奥さまの手料理が振る舞われるオープンキッチンがある。照明にてらされた工事途中のダイニングテーブルがすでに息づいているようでわくわくした。建設なかばだったため、感染症対策を組み込むこともできたそうだ。とにかくタッチレスにこだわっており、安心して利用できる。

「雑然と汚らしい感覚で、古い機械をおやじさんがいつまでも、ごちゃごちゃやってるっていう昔ながらは、もう終わりかなぁ」。バッティングセンターとともに育ってきた秀樹さんだからこそ、言葉に重みがある。どこか遠くをながめる視線に、よく見ていたであろう父のすがたを重ねているように思えた。

「打ったらおわり、じゃなくて打ったあとにいつまでもいてほしいんですよね。お年寄りにも若い女性にも来てもらって、ここでくつろいでもらいたい。それが本当にうまくいくかはこれからなんですけど、そういうやりかたでやってみようかな」。バッティングセンターで「くつろぐ」という組み合わせは斬新だ。まわりを見渡すと、バーカウンターには各席に充電コーナーが設けられている。

バッティングを楽しんだあとに、お菓子を片手に語らう若者たちが目に浮かんだ。店名の頭文字の意味のひとつに、「Tea（お茶）」がふくまれているのも納得できる。

自分の意思で

ここまで秀樹さんを熱くさせるものはなんだろうか。それは二十代の時から抱いている「なにかやりたい」という強い思いだそうだ。たまたま家業を継いだだけと前置きしつつも、「野球が好きではあると思いますね。なによりちっちゃな子どもたちが一生懸命打っているすがたに目頭が熱くなるんですよ。どうしても応援したくなっちゃう」としみじみこぼす。そのようすに、わたしは野球を頑張る子どもたちへの深い愛を感じとった。じっさい、訪れるお客さんのほとんどが少年団の小学生たちだという。高校の野球部の同級生がお子さんをつれてきたこともあるそうだ。これからは一緒に店に立つ奥さまと二人で、彼らの成長を見守っていくのだろう。

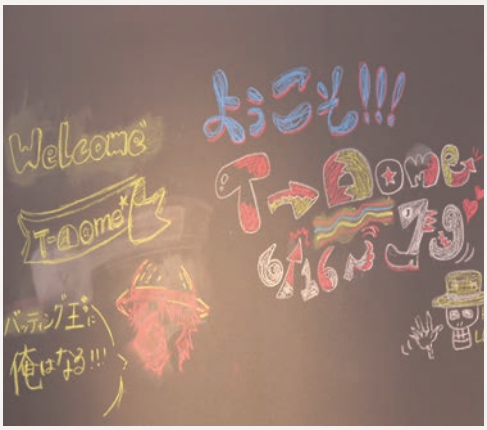
過去の記事をみせると、おやじの言葉ですねと、取材を覚えていてくれた。「二度目の勝負かけですよね。親子で。おやじは創業での勝負、わたしはリニューアルでの勝負。やっぱり最初の立ち上げには、おやじはおやじの難しさがあったと思うんですよ。わたしはまた時代にそったもので、これまた違う意味での勝負だと思うんですね。一度目は成功したけど、果たして二度目は成功するかどうか」と楽しそうに笑う。「最初は来ると思うんですよ、季節をひとつ巡ってどうだったかっていう。ただまぁ、もしなにか当初思ったようにうまくいかない場合は、どんどんやりかたを変えていきながら、修正していかないといけないなぁと思いますね。走りながら、思考錯誤しながらだと思います。最初からすべてうまくいくとは思えないし、いろんなことを改善しながらっていうことだと思いますね」。開拓者であり続けるその姿勢に、会ったことのない先代の魂も重なっている気がした。

今夏、都留にオープンするのは秀樹さんの軽やかな価値観をまとった「世界で一番あたらしいバッティングセンター」だ。

＊ ＊ ＊

さいごに「いずれは新聞記者になられるんですか」と尋ねられ、わたしはどきっとした。自分の夢はまだ漠然としたままだ。将来に迷っていることを打ち明けてしまう。そんなわたしに秀樹さんは「すべて無駄はないと思いますよ、遠回りしてきた人のほうがなにか深みがあるというか、肝が据わっているというか」と、微笑みかけてくださる。優しい声がじんわりと、わたしの心に広がる。きっとこれを味わいに店に通うお客さんもでてくるのだろう。

彼の20代からの夢が今まさに実現しようとしている。では、わたしが勝負をかけたいことはなんだろう。迫りくるボールに思いっきりバットを振りたくなった。



メニューが書かれる黒版は、オープンにむけてあたたかい言葉で飾られていた（2021年6月11日）

見て、感じて、考えて

彼らと再会したのは4月下旬の暖かい日だった。去年、都留市をはじめ、各地で大発生したマイマイガ。大発生は10年に一度の周期で訪れ、その影響は2、3年続くそうだ。

その日、家で洗濯物を取り込むさい、洋服にマイマイガの毛虫がくっついているのを見つけた。去年の卵からかえったものだろう。体長は5ミリにも満たず、細かい毛が黒い体を覆っている。左右に動くだけであまり前に進めないようだ。

それから2週間ほどたった5月初頭、田原の滝へ散歩に出かけた。柵の部分に、体長1.5センチほどの毛虫を見つける。体全体が黒いのは変わらないが、オレンジや黄色の斑点が規則的に並んでいた。その鮮やかさに目を惹かれる。じっとしていたため、動いているようすを観察できないのが残念だ。けれどそのおかげで、体毛は黒く長いもの、茶色で少し長いもの、黄色で短いものと、三種類ほどあるのが見てとれた。

実物を前にすると、色や形、動きかたなどたくさんの発見があった。今までなんとなく避けていたマイマイガが、自分の目で直接確かめることによって、「おもしろい生きもの」に変化する。次に出会うとき、彼らはどんなすがたをしているのだろう。出会いを心待ちにしている自分がいる。

柏倉和奏（地域社会学科2年）
＝文・写真

成長するにつれ動きは速くなり、体の色は明るい黄色へと変化していく（2021年5月22日）

小さな出会い、大きな発見

私はこの日、忘れられない体験をした。気晴らしに歩いていたとき、橋の上で、知らないおばあちゃんに話しかけられた。驚いたけれど、表情が優しく、気さくで話しやすいかただったのを覚えている。一緒に山へワラビを取りに行き、ワラビの炒め物をご馳走してもらった。その帰り道、お土産のワラビを片手に、私は夜道を全力で走った。おばあちゃんに出会う前は、心身ともに疲弊し、足取りが重かった。そんな自分が、今、全力で走っている。命のエネルギーに満ちている。

この体験を誰かに伝えたくなって、自分なりにじっくり考えてみた。なぜ楽しかったのか。なぜ元気が出たのか。いつもなら、思い出は楽しかった、面白かった、という言葉で片付けることがほとんどだ。今回は思い出をきちんと言葉にして、相手に伝えよう。たくさん考え、悩みながら、自分の体験を振り返る。

そうすると、おばあちゃんと一緒にワラビを取りに行くことも、ご馳走してもらうことも、自分の気持ちに正直に行動したから、楽しかったのだと気がついた。そうか、私の命のエネルギーは、自分がやりたいと思ったことをやることだ。体験を深く振り返ることが、大きな発見につながり、次への道を切り拓いてくれるような気がする。

霜田香菜子（国際教育学科1年）
＝文・写真

おばあちゃんと出会った城南橋。川の音が全身を包み込む（2021年5月26日）

連なる山

岐阜県で生まれ育ち、山をたくさん見ているうちに、山はどれも同じだと思いこんでいた。けれど、都留の山に生い茂る青々とした若葉が私を魅了した。澄みきった空によく映え、新緑は幾重にも広がっている。私は山の迫力に突き動かされ、先輩とともにハイキングコースである「都留アルプス」の富士山展望台を目指した。

その日は26度の夏日であった。ハイキング以前に歩くだけで疲れてしまう。水分をとって、気をとり直す。坂を登ると、太陽の光が山脈に降り注ぎ、緑の濃淡が生まれていた。それはまるでカーテンのひだのようであり、そのコントラストにため息がでる。また、山脈が弧を描く風景から地球が丸いことにあらためて気づかされ、目を見張った。

課題のこと、家事のこと、やることが山積みだった5月。毎日がまたたく間にすぎていき、生活するのがやっとだった。しかし、時間をかけて急勾配な坂を登ると、達成感を覚えて心地よかった。不思議だな。体は疲れているのに、気分は雲が晴れたように清々いい。心身くたびれていたのは焦りすぎていたからだと山から気づかされた。焦らなくても大丈夫。地に足をつけて、自分のペースをつかんでいこう。連なる山を見て深呼吸をした。

谷朱理（比較文化学科1年）
＝文・写真

「都留アルプス」からの眺め。山に吸い込まれそうな気さえする（2021年5月8日）

朝のランニング

都留に引っ越してきて、自宅のベランダから見える景色に驚いた。雲海のような霧が、山々を引きしまった空気でつつんでいる。その情景をうまくカメラに収められず、惜しい気持ちでいっぱいになった。

いつもなら朝の支度のために部屋へ戻るところだが、外はとてもさわやかでその気になれない。そこで、写真に写る山沿いを目指してランニングをしてみようと思い立った。いざ走りだしてみると、呼吸するたびに口へはいる空気がひんやりとしてとてもすがすがしい。いっぽう、袖をとおる風の冷たさには身震いする。ヒヨドリなどの鳥たちの鳴き声を背に、やまびこ競技場沿いの、ひと気がない坂道を駆け上がった。ところどころ出てくる「熊出没注意」の看板に、私は都留の自然への畏怖を覚える。うぐいすホールを抜けて大学を囲む山を一周し、木陰でひと休み。いつのまにか、枝から降りてきたマイマイガの幼虫が服にしがみついていた。家ばかりが立ち並ぶ地元ではできない体験に出会え、その非日常さをうれしく感じた。

この日はふだん見る機会がない早朝の自然を楽しむことができた。そうだ、これを機に毎朝のランニングを続けてみよう。慣れるころには、都留の自然が生み出す季節ごとの表情をもっと味わえるはずだろう。

廣瀬圭梧（比較文化学科1年）
＝文・写真

空があざやかに写る。運動部の元気なかけ声が響いてきた（2021年5月10日）

「都留アルプス」の春

5月2日、私は都留に来てはじめての散歩に出かけた。日差しは強いが、涼しい風が吹いていてとても気持ちがいい。目的もなくぶらぶら歩いているうちに森のなかに続く一本道を見つけた。「都留アルプスハイキングコース」の入り口である。

道に入ってみると、木が茂っているにもかかわらず澄んだ青空がはっきりと見える。その開放感から思わず深呼吸してしまう。木漏れ日がちらちら動くのを、時間を忘れて見ていた。木漏れ日の道をしばらく歩き、急な階段をあがっていくと、華やかな色が目に飛び込んでくる。サツキだ。サツキは5、6月が花盛りで、ちょうど満開だった。近づいてみると、サツキの木の高さは私の身長の倍ほどあって、頑張って見あげてもてっぺんを見ることができない。地元でもサツキの花が咲いていたが、こんなに高い木を見るのは初めてだった。近づくと花からかすかに甘い香りがする。それは祖父母の家の庭でかいだことのある香りと似ていて、なんだか懐かしい気持ちになった。

この日に散歩をしてみるまで、私は、森は怖いという印象を持っていた。まわりを取り囲む山々から圧迫感をおぼえたからだ。しかし、歩いてみると自然と肩の力が抜けるような、とても優しい空間だった。なにかに行き詰まったら、またここに足をのばそうと決めた。

長岡芽依（国文学科1年）
＝文・写真

日の光をうけて濃いピンク色が輝いている（2021年5月2日）

水と生きる

「用水路、でかっ」。都留で暮らしはじめ、真っ先に用水路の存在感に驚いた。そして流れる水は、いろいろな表情を見せてくれる。晴れの日には、水が太陽の光に照らされてキラキラしているのを見て、なにかいいことが起こりそうな気分になる。大雨の日には、水の量が増えてごうごうと音を立てるのを聞き、飲み込まれそうでぞくっとする。用水路と並んで歩くときはいつも、そんな水をつい眺めてしまう。

ある日、水の流れにそって歩いていくと、その先にはペットボトルやたばこが浮かんでいた。水の綺麗さからは想像もつかなかったことだ。これではせっかくの透き通った水がもったいない。

都留の水は大自然からの恵みだ。なにより水がおいしい。私は都留に来て水道水をそのまま飲むようになり、そのことを実感した。特に、お風呂あがりに飲む一杯はたまらない。けれど水のなかにあるごみの存在を知って、水のありがたみだけでなく、今ある水は簡単に失われうるのだということを身にしみて感じた。

都留では、人びとが水の流れを横目に道を歩き、当たり前に水道水を飲む。水が人の近くにあり、そのようすは都留の人びとが水とともに生きているようだ。そんな都留が、この綺麗な水を変わらず保ちつづけられる場所であってほしい。

宮崎明音（比較文化学科1年）
＝文・写真

私が毎朝通る道。澄んでいて底までよく見える（2021年5月1日）

西願寺（さいがんじ）のあかい芽

本誌107号で西願寺の枝垂れ桜が取り上げられた。その記事に気になる一文がある。住職の奥さんの「枝垂れ桜の木が花を咲かせるころには紅葉の木に赤い芽が出てきて、ピンクと赤のコントラストが見事ですよ」という言葉だ。まだ見ぬその光景が気になり、モミジを観察することにした。

赤松優香（国文学専攻2年）＝文・写真

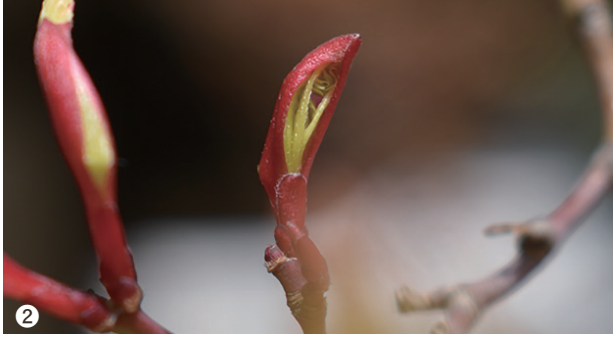
モミジは芽も赤い？

はじめて西願寺へ足を運んだのは2月14日のことだ。目立つ枝垂れ桜のそばに、それより少し低い木がある。一見地味なその木の枝をよく見ると、二又に分かれた芽が少し赤黒い色をしている。いざ赤い芽を目にすると、意識していなかっただけで、これまでにも見たことのある芽のような気がした。「こういうものか」。そう思って、次の観察は一ヶ月後になってしまった。二又に分かれていた芽がそれぞれ大きくなっている。2つで1つの芽ではなかったようだ。そして3月26日、西願寺へ向かうとモミジの芽はさらに変貌していた。ついに淡い緑色をした葉が赤い芽の皮からのぞきはじめ、芽によっては赤い実のような粒をつけていた。芽そのものが大きくなったため、色が明るくなり、以前より赤さが目立つ。住職の奥さんが言っていたように、サクラの花にモミジがよく映える。

急に成長してしまった芽にあわてて、まだ大きくひらいていない芽を探す。ひらき

茶色の枝の先や芽が赤い色をしている（2021年2月14日）

芽がふくらみ、色は明るく「芽」らしい見た目に（2021年3月11日）



①サクラを背景にモミジの赤が目立つ（2021 年 3 月 26 日）
②芽の皮のなかに葉が折りたたまれている（2021 年 3 月 30 日）
③芽の赤い皮を破って葉が出ようとしている（2021 年 4 月 2 日）
④花の中心の種もどきからめしべが伸びる（2021 年 4 月 2 日）

きってしまったものが目立つが、よく見るとこれからひらく芽も、まだ蕾（つぼみ）のものもたくさんあった。ルーペをかざすと、これから葉を出すものは芽の赤い皮のなかで葉が小さく折りたたまれているのがわかる。芽の赤い皮が切れるまで葉が大きくなれば発芽となるのかもしれない。いっぽう赤い粒をつけたものを観察すると、粒は葉と一緒に芽から出てきたようだ。「この粒はいったいなんだろう」。青いモミジのなかで、この赤い粒はよく目立つ。遠目から見るとまるで紅葉しているようだ。

4日後、チューリップのような形にふくらんだ赤い粒が花を咲かせた。赤い粒は蕾だったらしい。モミジの芽から葉と一緒に出てきた粒はあまりにも小さく、蕾だとは思いもしなかった。それ以前にモミジに花があるということを考えたことがなかった。モミジの小さな花は1センチもない。

なんとかカメラに収めようと何度もシャッターを切るうちに、モミジの花の構造に首をかしげる。モミジの花の中心には、私がかろうじて知っているモミジの種らしきものが見える。それは細長い2枚の羽のようで、羽の付け根に膨らみがあるところなどそっくりだ。これが成長して種になるのだろうか。そしてその種もどきを赤い粒が囲むようにしていくつもある。花弁も赤色と白色のものが交互についた不思議な構造だ。あまりにも小さく、写真だけでは赤い粒や花弁がどのようについているのか分からない。お寺の花のため、ちぎって分解することもためらわれる。その代わりという気持ちで何度も通ううちに、花の中心を囲むようにしてついていた赤い粒は黒いゴマのような見た目になった。ルーペで

出てきたばかりの双葉のなかに蕾が隠れている（2021 年 3 月 26 日）

⑤花の中心周辺に赤い粒がある（2021年4月1日）
⑥双葉や花のついた茎が大きく伸びている（2021年3月30日）
⑦種もどきが消えて赤い粒はおしべのやくに（2021年4月7日）
⑧葉が青々と茂り、一部は赤く見える（2021年4月19日）

拡大して見ると小学校の理科で習ったおしべにそっくりだ。そうすると、種もどきから生えているように見える、二又になった先端の、くるりと反り返っているものがめしべということだろう。

4月まで観察を続け、ひと段落ついたころ本学の先生にモミジの花がまだ変化することを教えてもらった。しかし何度行っても花は枯れて地面に落ちるばかりで、何が変わっているのか分からない。「種ができるに違いない」。そう思いつつ、見つけられないままひと月が経ち、5月4日、ついにモミジの種を1つ発見した。それから日が経つにつれて種が目につくようになった。

2月の硬い芽の状態から観察を続けて、ようやく花の変化を見届けることができた。けれど何がきっかけで赤い粒がおしべのやくらしい見た目に変化したのかは分からない。花の中心にあった種もどきも消えてしまい、種がどうやってできたのか謎ばかり残る。けれど、不思議に思えたモミジの花は、私がこれまで習ってきたとおりのれっきとした花だった。こうして西願寺に通い春のモミジの変化を知ることで、秋とは違う楽しみや発見があった。解決できなかった疑問は来年の課題にしよう。

種ができているところをついに発見した（2021年5月10日）

見ること、観察すること

4月半ば、モミジの花が満開になりはじめたころ、観察の帰りに本学近くにあるスーパーマーケット「オギノ」を通り過ぎた。何気なく地面を見ながら歩いていたとき、足もとに落ちているモミジの青い双葉に気がついた。「もの欲しさのあまり、無意識に西願寺

色いろな芽

モミジの写真を撮りつづけていると、「ほかの植物の花芽はどうなんだろう」と気になった。さいわい春は花芽がたくさんある。そこで色いろな植物の花芽を追うと、1つの芽から花を複数つけるもの、葉に花が咲くもの、地面から蕾が生えているように見えるもの、さまざまな芽を見つけることができた。

フクジュソウ　2月1日・8日

ツツジ　4月30日・6月13日

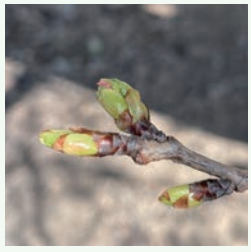
ハナイカダ　4月23日

ドウダンツツジ　3月30日・4月2日

ミツマタ　2月3日・3月16日・4月1日

アブラチャン　3月16日・4月1日

サクラ　3月23日



のモミジを取ってきたのかもしれない」。そう思い、あわてて拾い上げ周囲をキョロキョロと見渡した。そこで、立っているすぐそばの木の葉の形がモミジにそっくりなことに気づいた。西願寺のモミジと違って芽は赤くない。けれどずっと観察して目が慣れていた私には、それがモミジだとすぐにわかる。「なんだ。この木から落ちたのか」。そう思ったところで、駅から「オギノ」を経由し、大学へと続く道路に沿って植えられている一連の木々がモミジであることに気がついた。都留市に来て6年目の新事実だ。都留市ではよく街路樹を見かけるが、その種類などほとんど気にしていなかった。私は自然が好きで、歩きながら周囲を見渡していたつもりだった。けれどそれは風景を愛でるという受け身な行為だ。そこではすべての自然は「脇役」であり、名も無いものに過ぎない。そこに何があって、どのように自然が生きているか。そういうことに気を留めながら、考えたことがなかったのだなと痛感させられるできごとだった。

本誌編集部の活動に関わるようになって約2年が経つ。周囲に生きるものたちを知ることで、私の世界が少しずつ広がっている。

満喫 高川山

高川山（たかがわやま）は都留市と大月市の境にある山だ。都留市二十一秀峰に登録されていて、よく晴れた日には山頂から富士山や辺りの山々を一望することができる。また、富士急行線の禾生駅（かせいえき）やJR中央線の大月駅などからのアクセスが良く、登山コースも豊富であるため、例年多くのひとが訪れる。春の高川山での発見を楽しみに、私は友人と歩き出した。

3つのコース

4月7日の午前8時、私は友人と禾生駅で下車し、高川山の山道入り口にやって来た。そこにはこげ茶色の標識が立っている。標識に記されていたのは「至高川山、約70分」、「至高川山・シラノサワコース、約90分」、「至禾生駅、約50分」。今回は一つ目のコースから山頂を目指すことにした。

いざ高川山へ

見上げると、青く晴れた空と春の明るい太陽がまぶしい。この好天ならば、山頂からの景色はどれほどなのだろうとワクワクする。山道に踏み入り、5分ほどゆるやかな坂道を歩くと、木の根が地面から浮き上がり階段になっている場所に出た。階段の両側には、空をふさぐほど高い木々が一定の間隔で並ぶ。幹は抱きつくと簡単に両手をつなげるほど細い。山の斜面に人の手によって植えられた木なのだろうか。そこからさらに5分ほど進むと、山道の端には1メートル近くありそうなごつごつした岩や、苔むした流木が堆積していた。その光景から、ここは以前、沢だったことが想像できた。今はちょうど水の流れていない時期なのだろうか。それとも、とうの昔に水源が枯れてしまったのだろうか。山に登っていると、見たものすべてに次々と疑問がわきあがる。

奥へ進むと、つけもの石くらいの大きさの石が坂の上まで大量に積み重なっていた。地面や近くの植物に支えられて安定している石もあれば、足を置いただけでぐらつく石もある。足の置き場を見極めながら登りきると、ふたたびゆるやかな坂道に出た。道にはアブラチャンというクスノキ科の木が何本も生えている。幹は細く何又にもわかれ、下のほうで絡み合い、空に向かって広がっていた。そのかたちのまま、ある木は左、またある木は右に傾いている。まるで、自分がウサギやイノシシになり、低い視点から自然を見ているようだ。アブラチャンのあいだを抜けた先にも階段があった。そこははじめの階段と同じように木の幹が浮き上がってできていた。自然にできた階段は、段の高さがまばらで登りづらく、体力を消耗する。そうした場所を歩いていると、偶然が積み重なってこの地形がうまれたことを感じる。同時に、自然がつむ

①岩場では足場を確保しながら踏み外さないように慎重に登る ②地面から浮き出た木の根を見ていると、生命力に圧倒されそうだ ③いつものクリームパンも山では特別な味になる ④アブラチャンは地面から花束が飛び出したように生えている

いできた長い時間が垣間見えた。

なんとか階段をのぼりきると、目のまえには急坂がつづいていた。山頂に近いため、傾斜がきびしい。休憩をはさみながら、「く」の字型にジグザグと折れ曲がっている道を登る。ゆっくり登りきると、ふと視界がひらけた。尾根に出たのだ。道なりに進むと、「古宿・中谷入コース」との分岐があった。そこからすぐに狼煙台跡があらわれる。山道よりも小高くなっていて、葉が落ちてしまった枝の隙間から東の方角をのぞくことができた。山を歩いていると、このように見晴らしがよい場所に出ることがある。そのたびに私は、道の途中でこれほどきれいに遠くの景色が眺められるならば、山頂からはどこまでの景色を望めるのだろうと胸をおどらせていた。このとき狼煙台跡から見た山のふもとのまち並みや青空も、もうすぐ登頂だ。そう思いながらしばらく歩く。すると一気に太陽の光が差し込んできた。ついに山頂に到着だ。

山頂の景色とクリームパン

さえぎるものが何もないため、まぶしい太陽の光を体じゅうに受け、登頂した嬉しさで笑みがこぼれた。遠くの空では真っ白な雲が低いところで流れ、ちょうど山々に重なっていた。南西に見える富士山も雲に隠れていたが、風が雲を運ぶことでときおりその山肌をのぞかせる。山頂の中央にあるこげ茶色の立て看板には、白い文字で「秀麗富岳十二景、十一番山頂」「高川山、９７６ｍ」と記されていた。そのすぐそばには石でできた円柱の羅針盤があった。のぞきこむと、おもてには山頂から見える他の山々の名前が刻まれていた。正面には石割山や御正体山、鹿留山、杓子山がつらなっているようだ。いつかあれらを縦走してみたいと思いながら羅針盤と景色を照らし合わせてみる。どの方角にも山があることにあらためておどろいた。またここへ登るころには、山頂からの景色を登頂した山でいっぱいにしたい。そう考えながら岩の上に座っていると、横にいた友人が「あげるよ」とクリームパンを一つ手渡してくれた。私たちは二人並んでそれをほおばった。

いつもより近い空。遠くにあるはずが、くっきりと見える山々。そのふもとにちいさく見えるまち並み。日常では見られないここだけの景色を、パンの甘さとともにじっくりとか

写真はすべて 2021 年 4 月 7 日に撮影しました

⑤木の幹があまりにも綺麗に四等分されていたので目を疑った ⑥下山しているなかで見つけた花の咲いている木は、その場の雰囲気をぱっとはなやかにしていた ⑦鎖場で岩に打ち込まれた鎖を頼りに降りるすがたはアクション映画の一場面のようだ

みしめる。ゆるやかに流れる時間を堪能し、私たちは山頂をあとにした。

謎がのこる高川山

下りは来た道とちがう道から行ってみよう。そう二人で話し、シラノサワコースを利用することにした。山頂を出ると、すぐに鎖場（※）があらわれた。岩の斜面の角度は80度ほどはありそうだ。そのうえ、足場がほとんどない。そのことにすこし焦りながらも鎖をぴんと張り、一歩ずつ慎重に足を下ろす。なんとか地面に着いたころには手が汗と泥まみれになっていた。

鎖場を離れてしばらくすると、登りでは見なかった濃いピンク色の花をつけた木があった。コースを変えると一つの山でもこれほど風景がちがうのかと実感する。さらに進んで行くと、ざらざらとした肌の木が点々と生えているなかに、一本だけ不思議な木が混ざっているのが目についた。その木は地面から80センチほどの高さで幹が四つに分かれていた。あまりにきれいに四等分されているため、どうやってこのかたちになったのだろうと想像をめぐらせる。木の中心に雷が落ちたのだろうか。それとも誰かが手をくわえ、あえてこのかたちをつくったのだろうか。細い木々、水のない沢に加え、また一つ謎が増えた。高川山は不思議なことだらけだ。四つ又の木からしばらく歩くと、林道のなかの舗装された道路に出る。そこからしばらくすると、山道入り口に戻ってきた。これで下山は終了だ。達成感を空に放つように、私は思いっきり伸びをした。ふと見上げた空は、朝よりさらに青く澄んでいた。

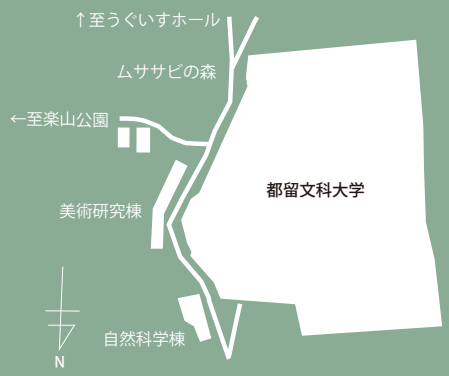
＊＊＊

春の陽気とよく晴れた空が今回の登山を彩った。高川山を訪れるのは初めてだったが、コースにより異なる表情を見ることができ、一度で多くの発見があった。また、不思議な自然にふれたことや、都留市にある数々の山を一度に望めたことは、今回の登山においていちばんの収穫だろう。遠くを眺めながら友人と食べたクリームパンの格別な甘さも、きっと忘れられない味になる。さて、次はどの山を満喫しに行こうか。新しい山との出会い求め、はやる心で地図をひらいた。

青松笑子（比較文化学科2年）＝文・写真

※通行がむずかしいため、鎖がかけられた岩場

センサーカメラが写した動物たち



本学フィールド・ミュージアムでは、キャンパス内の森にセンサーカメラ（赤外線を感知すると自動的にシャッターが切れるカメラ）を設置して動物の調査をしています。今号では 2021 年 5 月に撮影された動物を紹介します。本誌 107 号と同じ場所で撮影しました。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

◀ニホンジカ

（2021 年 5 月 2 日）ムササビの森

体の色が薄いためこどものニホンジカだとわかります。過去に記録されたニホンジカはカメラと目が合っていることが多く、この子も例外ではありませんでした。

アナグマ▶

（2021 年 5 月 6 日）自然科学棟

アナグマは短いしっぽと脚が特徴的です。水路のなかで這いつくばっている体勢を見ると、「あたま隠して尻隠さず」という言葉を思い浮かべます。

◀ハチのなかま

（2021 年 5 月 10 日）自然科学棟

センサーカメラに珍しく昆虫が映りこみました。奥にも 2 匹飛んでいるようすが見られます。ハチのなかまはこの時期に山や森で活発になります。

ムササビ観察日記
ー7年目ー

2013年に本学キャンパス内の「ムササビの森」に2つの巣箱を取りつけて以来、観察を続けています。2021年3月31日には、ムササビの赤ちゃんが誕生し、「陽（ハル）」と名付けられました。ムササビのようすは本学ホームページのムササビライブカメラ（http://www.tsuru.ac.jp）でご覧になれます。あたたかく成長を見守ってください。

本学フィールド・ミュージアム＝文・写真

今回は、4月1日のようすをお伝えします

15時57分　つつまれて

股下からでた尾がお腹を覆っています。赤ちゃんはそのなかに包まれているのでしょうか

18時23分　色ちがい？

お母さんのお腹のうえで、もそもそと動く1頭の赤ちゃん。毛はお母さんよりも黒っぽいです

18時52分　ゆりかご

お母さんがお腹と飛膜（ひまく）と足で赤ちゃんを包みこんでいます。ゆりかごのように見えました

18時58分　頭隠して……

お母さんの飛膜から赤ちゃんの尾が見えています。長く丸い尾は赤ちゃんにも見られます

20時30分　お留守番

日が沈んで数時間後、お母さんは外へ出かけました。赤ちゃんは巣材にうもれてお留守番です

23時36分　小さいからだ

赤ちゃんのお腹が見えています。白っぽい色をしています。小さい手足も見られました

道すがら、小さな手いっぱいに集めてきたタンポポの花の黄色とスミレの花の淡い紫色が、褐色の道を華やかに飾る

松柏の志

後編 あるがままの心

本誌107号に引き続いて、長生寺（ちょうしょうじ）の自然を取り上げる。前編では中雀門（ちゅうじゃくもん）の前にそびえ立つ二本のスギの木に注目した。そしてスギの木の過去を知ることで、木を残そうとする人びとの一員となれた。私は、人びとが木を含む自然を大切にしようとする気持ちのおおもとを探るべく、ふたたび長生寺を訪れた。

見て、聞いて、触れて、実践

4月8日の朝がた、冷たい向かい風に逆らいながら自転車をとばして長生寺へ向かう。駐車場に着くと、何組かの親子がいた。そこで、住職さんが市川遥奈（いちかわはるな）さん（34）を紹介してくださった。市川さんは、お外であそぶおやこの会「はねこっこ」という団体を2年前から率いている。「はねこっこ」は9年以上にわたって、子どもたちと長生寺の一帯で山歩きをしたり羽根（はね）子地区を散策したりしている野外共同保育サークルだ。今回は16人の参加者のうち、10人が子どもである。年齢は7ヶ月から5歳まで幅があった。長生寺のまわりは急な斜面が多いため、こんなに小さい子たちが山を登れるのかとハラハラしてしまう。

あらかた人数がそろったので、全員で輪になって朝のごあいさつをする。市川さんから左どなりのひとに「おはよう」と声をかけ、ぎゅっと手を握る。言葉と気持ちが一巡りしたところで山歩きがスタートした。

上：たおやかなワラビ。煮物になるのか炊き込みご飯になるのか　右：子どもたちが座り込んでいる。急勾配な山道の途中で、なにか気になるものを発見したようだ

子どもたちのようすを見つつ市川さんと話をしていると、なにやらうしろが騒がしい。振り返ると、数人の子どもたちが登山道沿いの崖をはしゃぎながらよじ登っていた。意外な光景を見てあぜんとする私に、「ああやって子どもたちは植物につかまりながら崖を登っていくんです」と市川さんが笑いかける。子どもたちと少し先で合流すると、彼らとともに崖を登っていたお母さんたちの手には、たくさんのワラビがあった。子どもたちが目を輝かせる。「一緒に探してみよう」、「このへんにあるよ」とうながすと、お目当てのワラビを見つけてごきげんな表情を浮かべた。山の恩恵にあずかるのは今回にかぎった話ではないようで、「前回はサクラの花びらを採ったんだけど、今は塩漬けにしているんです」と教えてくださる。山歩きのたびに今ある季節を堪能していることがうかがえた。

「なるほど」。このとき、自然が残されてきた理由に気づいて、ハッとさせられた。自然は四季おりおりの風景を見せ、地域に合った生きものを育む。そして、訪れるたびに新たな発見をもたらしてくれる。人によって学び得ることは異なるが、そのどれもが人生を鮮やかに彩る。そういえば、前編で取材した中雀門の前にある二本のスギの木も、自らの歴史を伝えることで思いがけない戦争の影響を教えてくれた。目に見えるすがたや目に見えない時間をとおして、私たちに変化をもたらしてくれるからこそ、今ある自然は大切に守るべきものなのだろう。実りあるメッセージを取りこぼさないように、自然を抱きしめていたい。

うっそうとした森にはさまれるかたちで砂利道が伸びている

ゴール前最後の下り坂。道の脇に生えていたオナモミを子どもたちとくっつけ合い、童心にかえってはしゃいだ

「お姉ちゃん、撮って！」の声に迷わずシャッターを切った

良い意味の自由

休憩をはさみながらゆっくりと山のなかを散歩していたため、長生寺の境内に降りてきたときには出発から3時間以上が経っていた。芝生の広場にレジャーシートを敷いて、持参したお弁当を取り出す。「すべての食べものと、つくってくれた自然と人に感謝していただきます」と、全員が口をそろえてごあいさつ。歩き疲れていたのだろう。早起きして詰め込んだおかずを口に運ぶたびに、身体が喜んでいるのを実感した。

はやばやと食べ終えて遊びはじめた子どもたちを横目に、お母さんたちにお話をうかがう。すると、良い意味で自由に遊べることが「はねこっこ」ならではの経験だとくちぐちに語った。たしかに子どもたちは好奇心のおもむくままに振る舞っている。市川さんの長女も、山道に咲く花を集め、アリに襲われたいもむしを助けようとし、「お姉ちゃん、よーい、どん！」と声をあげて下り坂の砂利道を私と競走した。

羽根子地区の人びとを中心に整備された山では、子どもたちが進んでおこなう活動を尊重する。植物を採っても、枝を振り回しても、誰かに落ち葉を投げつけても、とがめる人はいない。大人たちは、子どもたちが自ら考えて行動できるように声をかけるだけだ。子どもたちは自由に活動するなかでなにが危険なのか、なにをしてはいけないのかを身をもって学んでいる。市川さんの「手前味噌だけど、（「はねこっこ」の）子どもたちは経験値が高い」という言葉にもうなずける。人間が本来もつ、なにごとも楽しめる力を生かし、五感すべてを使って四季を捉える。この体験は誰にとっても有意義なものにちがいない。

地面に力強く食い込んでいるシカの足跡に興味しんしんなようす

松柏の志

子どもたちと遊んでいると、「子どもたちは『満足感の自給自足』をしているんです」と市川さんがおっしゃった。「満足感の自給自足」とは、子どもたちが自分の決めた目標や基準を達成したという事実に満足し、他人の評価には目もくれないということを指すそう。つまり自己充足だ。したいことを自分の思い描くように実行できれば、周りの反応に関係なく満ち足りた気分になれる。子どもたちならではのこの感覚をいつのまに忘れてしまったのだろう。胸がチクリと痛む。いっぽうで、ずっと覚えていたいこの言葉をじっくりと噛みしめた。

むじゃきな子どもたちが全身で教えてくれた満足感の自給自足は、私にとって特別なプレゼントだった。大人になるにつれて、他人に動かされ、評価をゆだねるようになっていた。もし満足感の自給自足をすることができたら、どのような状況でも良い意味で自由に振る舞い、芯のとおった自分でいられるはずだ。逆境や苦境であっても、信念や志を貫くことをたとえた「松柏の志」。長生寺で出会った二本のスギの木と「はねこっこ」の子どもたちが、この志を抱く足がかりを築いてくれたようだ。私の心はつきものが落ちたように軽くなった。

＊ ＊ ＊

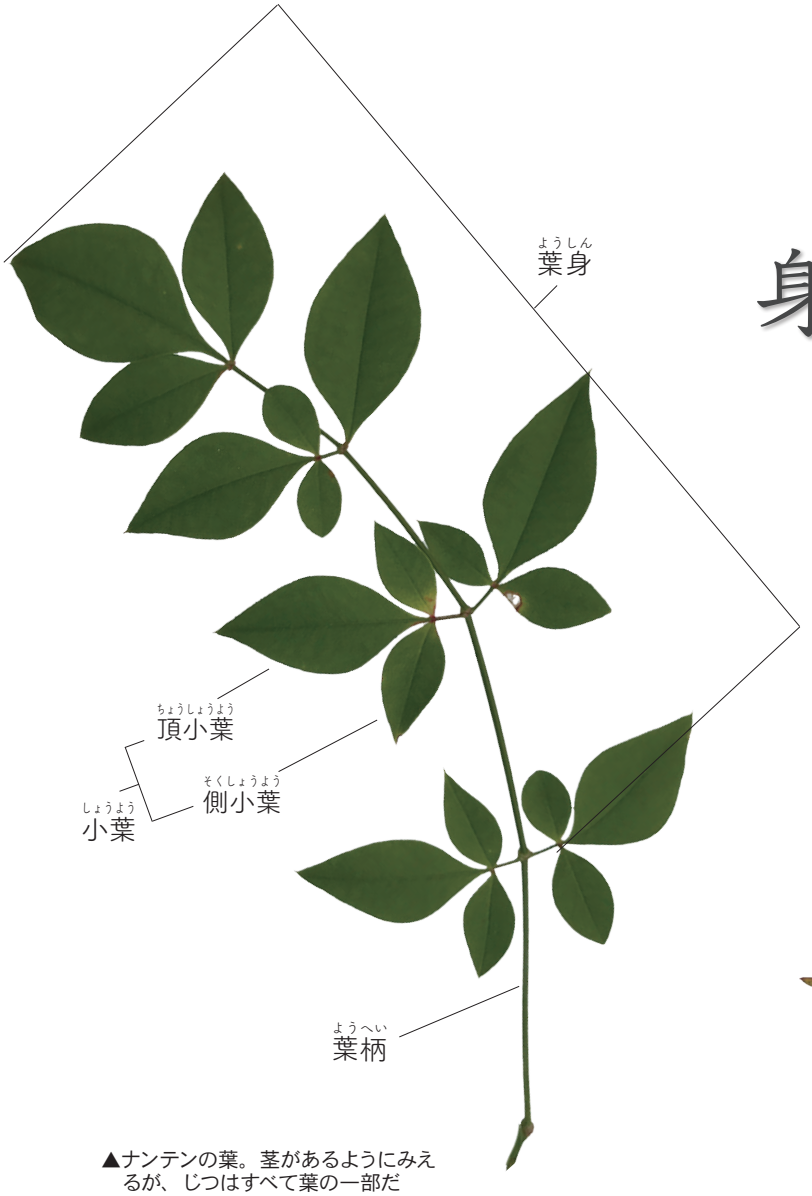
長生寺での体験と気づきから一ヶ月ほど経ったある日の帰り道のことだ。久しぶりに聞いた曲のなかにある「こどものままでおとなになろう」という歌詞を聴いたとたん、思わず涙してしまった。あれ、高校時代に何度も聴いていたはずなのに、と戸惑う。しかしここまで胸がいっぱいになったのはきっと、長生寺で数々の出会いに恵まれたからだ。大人になったからこそ、子どもらしく、自分らしくいたい。あるがままの心をもち続けていたい。長生寺での経験が本来の私を教えてくれた。

辻口いづみ（地域社会学科3年）＝文・写真

3歳の男の子が撮ったハナモモ。艶やかな赤が青空に映える

写真はすべて2021年4月8日に撮影しました。

身近な語り部



▲ナンテンの葉。茎があるようにみえるが、じつはすべて葉の一部だ

▲生垣から飛び出ていた先端の葉。赤く染まって斑点もみられる

いつもはまっすぐ家路につくが、今日はある植物が目に留まった。ナンテンだ。観察するなかで、今まで気づかなかったことがみえてきた。

木漏れ日

こんな植物だったかな、と疑問に思いながらナンテンに近寄る。家の壁と塀に挟まれたせまく薄暗い場所に、数本が密集していた。住みよいとは思えない環境で、1.5メートルほどまで育っていることに驚く。どこから栄養を得ているのかと、ついあたりを見回してしまった。

ナンテンは、ずっと日陰のなかで育っているのかと思いきや、日光があたる時間があった。早起きしてみにいくと、うえの一部分に、朝日が当たっている。また、昼下がりから夕方にかけても日光がナンテンをてらす。日光が当たると葉の鮮やかさが増してみえる。薄暗いなか見たナンテンとは違った、生命力あふれるようすが伝わってくる。私の想像よりも、ナンテンは日光に当たることができていたらしい。木漏れ日でここまで大きく育ったと思うと、ナンテンのたくましさに感心するばかりだ。

見比べる

ナンテンは、深緑の葉をつけている。小葉は、親指より一回り大きいくらいで縦に細長い雫（しずく）のかたちだ。葉柄の先端についている小葉と、それより二回り小さい小葉が、葉柄をはさんで左右対称に1枚ずつついている。この複葉（※）がいくつも集まって、大きな葉が形成されていた。

何度か観察しているうちに、小葉によって形が少し違うことに気がついた。3枚すべての小葉がとがっている葉もあれば、頂小葉はとがっていて、左右対称な2枚の側小葉は丸くなっている葉もある。同じ個体に二つの小葉のかたちがあるため、ほかの葉はどうだろうかと時間を忘れて見比べてしまった。

環境と葉の色

ナンテンは生垣に適した植物だと聞き、小径（こみち）を見渡しながら歩いてみる。数本のナンテンが生垣として植えられている場所で立ち止まった。そこには、2メートルを超えるナンテンがある。いままで観察していたナンテンよりもひらけた場所に生えているからか、葉の色が違う部分がある。

葉が密集している内側は、濃い緑で青々とした葉がある。いっぽうで、先端や一本だけ飛び出しているナンテンの葉は赤みがかった色に変色している。葉に当たる光の量の違いだろうか。より多く日の光にさらされる葉柄や小葉は、赤みが強い。紅葉のようなきれいな赤というよりは、真っ赤に日焼けした肌のようだ。さらに、先端というのもあるかもしれないが、葉柄がほかと比べて細くみえる気がする。

別の場所で、周囲に植物が存在しないナンテンを発見した。このナンテンは1メートルくらいと低く、先端部分にしか葉がない。なかばにある葉柄には葉がついておらず、わずかに残っている小葉も小さく、赤く染まっている。強い日光にさらされている葉柄が細いのは見まちがいではなかった。強い風が吹けばいまにも折れてしまいそうな細さだ。密集してきゅうくつそうに見えたナンテンだったが、じつは、ほどよい日光量になるように調節していたのかもしれない。

観察を続けると、ナンテンの植えられている方角によっても印象が違うと気がついた。一本道に植えられているナンテンをみてみる。右側の道路沿いに植えられたナンテンは北東をむいている。いっぽう、左側は南西をむいている。西日が当たる方向に植えられたナンテンは、葉の赤みが強かった。西日が強すぎて葉が傷ついてしまったのだろうか。家や塀のあいだから差し込む日光の角度や時間帯の違いがナンテンの葉にあらわれていた。

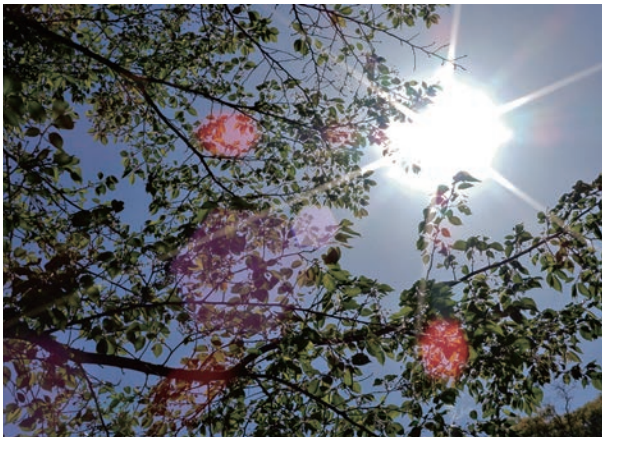
＊　＊　＊

ナンテンの葉がみせる表情は、位置が数十センチずれるだけで変わる。道ばたの植物だといつも素通りしてしまっていた。しかし、ナンテンは、自身の葉や葉柄の特徴、この場所の日の当たり具合のことを、近づいた私に静かに語ってくれる。

最近では、生垣の一つひとつをみて歩く。この場所にもナンテンが植えられているのか。この植物はさっきみた植物と同じだな。植物とひとくくりにみていた自分では気づけなかった。もっとよく見て、耳をすませよう。身近にある小さな植物の世界が、きっと目の前に広がるはずだ。

林舞子（学校教育学科2年）＝文・写真

※複葉……葉身が複数の部分に分かれている葉のこと



上：都留市下谷（2021 年 4 月 18 日）
左：都留市川棚（2021 年 4 月 2 日）
右：都留市中央（2021 年 4 月 18 日）

都留の風景写真集

―惜春の候―

例年より桜の開花が早く、都留に来てから三度目の春はせわしなく過ぎていったようです。季節の流れに追いつきたくなって、カメラだけを持って出かけることもしばしば。こうしてたまっていったかけがえのない瞬間のなかで、私の心を揺さぶったものをおすそ分けします。

辻口いづみ (地域社会学科 3 年) ＝文・写真

上：都留市川棚 (2021 年 4 月 2 日)
下：都留市田原 (2021 年 5 月 24 日)

都留を、観察し、記録する
FIELD NOTE
no.108 Jul.

発行人
北垣憲仁
統括編集者
西教生
編集長
風間悠花〔1.56〕
深沢有佳〔8-9.14-15.26-27〕
渡邊唯〔6-7.10-11.54〕
副編集長
阿部くるみ〔2-3.18-19.54〕
編集
赤松優香〔4-5.37-40〕
辻口いづみ〔46-49.52-53〕
青松笑子〔41-43.44〕
佐藤優美〔20-21.22-23.54〕
髙木帆月〔12-13.24-25〕
髙橋杏佳〔16-17.28-29〕
林舞子〔45.50-51〕
丸谷美寧〔30-33.55〕
柏倉和奏〔34-36〕
霜田香菜子〔34-36〕
谷朱理〔34-36〕
長岡芽依〔34-36〕
廣瀬圭梧〔34-36〕
宮崎明音〔34-36〕
ロゴデザイン
工藤真純
〔 〕は編集担当ページ

FIELD·NOTE (フィールド・ノート) 108 号
発行日：2021 年 7 月 9 日
発行部数：2800 部
発行・編集：
〒402-8555
山梨県都留市田原 3-8-1
都留文科大学地域交流研究センター
『フィールド・ノート』編集部
E-mail : field-1@tsuru.ac.jp

バックナンバーは都留文科大学地域交流研究センターにあります。気軽にいらしてください。

編集後記

わたしの思い出

れもん、という梶井基次郎が書いた小説を知っていますか。主人公が、画集を積みかさね、その頂上に黄色いレモンをおいた場面が有名ですよね。私がこの『檸檬』で特に好きな場面は、主人公がびいどろを舐めるところです。彼はその味を「幽かな涼しい味」と表現しています。どうしてこんなに思い出に残っているかというと、私もびいどろを舐めたことがあるから！ かなり幼かったころなのでぼんやりとしか覚えていません。しかし冷たい感覚とツルツルの食感に、「涼しさを食べている」と興奮した覚えがあります。もちろん、親には知られないように内緒で舐めていました。自分の体験と交わることで文学は余計に面白くなるんだな、と実感します。(佐藤優美)

キティちゃんのビデオ。小さいころ、白いドレスを着たキティちゃんがサンリオピューロランドの階段を歌いながら降りてくる映像をよく見ていました。そして飽きるまで何度も実家の階段で真似をする。帰省するといまだに、両親からこの話でいじられます。すこし大人に近づいた今、久しぶりに聞きたくなって調べると、恥ずかしくなるようなロマンティックな歌詞でした。当時はそんなことを意識していなかったけれど。ドレスやシャンデリアなどかわいいものへの憧れは、今もキラキラしたものにときめく気持ちの原点です。15 年前の自分へ。まだ白馬の王子さまは迎えにきてくれていないけど、あの歌を口ずさみながら今度憧れのサンリオピューロランドに行ってきます。(阿部くるみ)

しらゆき姫になりたい！ 優雅でのんびりと森のなかで暮らし、歌を歌えば動物たちが寄って来る。動物や小人に王子様、みんなから好かれるしらゆき姫が私の憧れでした。思い返せば、小さいころは池や湯船など、水がたまっているところを見つけてはなかを覗きこんで、お姫様になりきって歌っていたなあ。猫や鳥がいたときにはそーっと近づいて話しかけたこともあった。逃げられたけど。大人になった今でも自然や音楽が大好きな心は変わりません。じつは、今でも森に観察に行ったらついあのときの歌を歌ってしまいます。歌ってもしらゆき姫のように動物が寄ってこないことが発覚しましたが、私は諦めません。都留の動物たちと仲良くなって素敵な写真を撮るのが今の夢です。(渡邊唯)

次回予告

「駅間」（仮）

駅から駅のあいだを、歩いてみる。
自分らしい目線から人や自然との
出会いをお届けします。

FIELD·NOTE no. 108

発行日 2021年7月9日（年3回発行）
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 都留文科大学
地域交流研究センター『フィールド・ノート』編集部

動物たちのあしあと

フィールド・ミュージアム

都留フィールド・ミュージアムとは？
私たちのフィールドは、特定の地域に固定はしませんが、とくに都留市を拠点として富士山とその山麓、桂川（相模川）流域に注目して活動しています。

名称について：大学だけの取り組みではなく、広く市民と共有し、地域に開かれた交流を育みたいという思いから、「都留フィールド・ミュージアム」という表記を用いています。本学の地域交流研究センターが、この活動を担っています。